

越境するコンブ ～近世と近代の“海域”を巡って～

井出 晃憲

■序 章—問題提起

この章では、問題意識を明確化した上で、コンブを研究対象とした理由、先行研究を踏まえた上での本論文の意義についてまとめた。

近代化の諸特徴のひとつとして、国民国家を枠組みとした中央集権的システムの構築が挙げられる。その結果<線としての国境>が固定化され、“辺境”におけるボーダーレスな交通・交易活動は表向き不可能なものとなった。そこに至る経緯は時間的・空間的に視野を拡大させて考察する必要がある。その参考としたのは、フレデリック・ジャクソン・ターナーの<領域としての辺境>概念である。また、ユーラシアという視座に立って5千年に及ぶ経済の持続的な相互活動を叙述したアンドレ・ギュンダー・フランクらの<世界システム>概念である。こうした観点に立って、日本列島弧とその周辺部における古来固有の交通・交易活動の変遷を、ひとつの商品の流通に焦点を当て“越境”というキーワードのもとに叙述することとした。

コンブに着眼した理由は、以下に挙げるような興味深い特徴があるからである。

- (1) 産地がおおよそ北緯38度線以北、特に北海道であり、北方に局在している。
- (2) 購入量の第1・2位は沖縄県・富山県が占め、産地から隔絶している。
- (3) 西日本が品目・量ともに利用が多く、

地域間の利用差が顕著である。

- (4) 近世における琉球・中国大陸への輸出など、国際性を有した交易であった。
- (5) 国内内陸部への輸送には、“イタダキ”という特異な運搬形態があった。
- (6) 鰹と昆布の「出し」が日本人の味の原点だといわれる。
- (7) 年中行事や人生儀礼に象徴的に利用されることが多い。

コンブ流通に関しては大石圭一らの詳細な先行研究があるが、それを踏まえた上での本論文の意義は二点ある。第一は、コンブを“メディア”として捉え、その流通を広義の“コミュニケーション”として検討した点である。特に、近世から近代にかけての交通網の変遷との関連からその動態を追った。第二は、日本列島弧付近に設定される複数の“海域”を越境するという観点からコンブ流通を考察した点である。

■第I章—採取から加工まで

この章では、海中植物としてのコンブ、およびそれが食品となるまでの過程を追った。

まず「コンブ」という呼称について、日本語・アイヌ語・中国語各々からの起源説を紹介し、英語での使用方法にも触れ、いかに国際交易品としての地位を獲得しているか言及した。その中で、本論文において海産物／食材

としては「コンブ」とカタカナ表記、食品としては「昆布」と漢字表記をする根拠も示した。

その上で、日本列島弧沿海に生育し食材となる主要な10種類のコンブを列挙して、学名・分布・特徴・利用法などを整理した。そして、採取方法については今昔のコンブ漁の模様を簡介して比較し、加工方法については4分類した上でさらに個々の商品となるまでの工程の概略をまとめた。

この章で特に強調したのは以下の二点である。第一は、コンブ漁については江戸時代の場所請負制下でのアイヌによる方法と現代の方法とに根本的な差異がないという点である。この時代的連続性からコンブ食史の長さが窺われる。第二は、昔も今も加工の中心は大阪であるという点である。これは交通網の歴史的構築過程に関係する。

■第二章—コンブの食類型

この章では、大石の論考にしたがって地域的・時代的観点からコンブの食類型を整理して両者の関連を指摘するとともに、メディアとしてのコンブのありようについて考察した。

まず、地域的特質として、

- (a)「北海道型」：「出し」利用が中心
- (b)「北陸型」：「とろろ、おぼろ昆布」利用の付加
- (c)「大坂型」：「昆布佃煮」利用の付加
- (d)「西海型」：「昆布の葉体煮食」が中心
- (e)「三陸型」：「抄き昆布」の存在
- (f)「東京型」：「大坂型」の縮小型
- (g)「南海型」：「大坂型」の縮小型

と7区分して各々の特徴を述べた。つぎに、時代的変遷を以下のように5区分して前者との関連を整理した。

<細布昆布時代> 古代~1220年頃（安東氏が

蝦夷管領となる）生産量10t未満(a)に対応
<宇賀昆布時代> 1220年頃~1639年（加賀藩の米の大阪への回漕の開始）100t台(b)

<元揃昆布時代> 1639年~1799年（高田屋がエトロフ航路を開く）1000t台(c)

<長昆布時代> 1799年~1969年（促成昆布栽培の開始）1万t台(d)

<促成昆布時代> 1969年~現代 10万t台

北海道開発の進展による対数的増産と種類増、それに伴う輸送航路の延長という時代的変遷が、地域的特質の差異をもたらしたと考えられる。この差異を実証的に確認するに際しても大石の考案による「K-Tダイヤグラム」を参照した。それは昆布(K)と昆布佃煮(T)の消費を定量的に分析して地域差を統計的数値で表わしたものである。

続いて、乾物であるコンブは時空を超えたメディアとして、“長距離通信”機能がめざましいという観点から、流通の際にコンブが携えて伝達する“メッセージ”について考察した。それは上述の食利用のあり方に留まらない、広範な文化的・儀礼的風習である。特に、縁起の観念を元に寺院・宮廷・武家等にて昆布にまつわる風習が成立した点、それが庶民にも波及して年中行事や人生儀礼の一部を成した点、さらに伝統となって今なお存続している点などについて事例を挙げて説明した。他方、所謂“コンブロード”はコンブとその付帯情報だけが一方向に流通したものではなかった。逆方向の流れとして、上方文化が地方へ伝播し今なお存続している点についても事例を挙げて言及した。

■第三章—“海域”と“海洋史観”

この章では、“海域”と“海洋史観”という概念およびその実態について検討した。

まず海域については濱下武志の先行研究を援用して整理した。海域とは、海が陸を形作り条件づけているとする捉え方である。そして、海と陸を海岸線において峻別せず、陸地をも組み込んだ海域の作用を想定する。これまでの地域研究では、海の役割が過少に評価されてきたのではないか。こうした検討の上、古来、海は「人為」をはるかに越えた「自然」と理解されてきたが、実体はすぐれて「人為」の海であったとの濱下の説を引いた。

具体的には、ユーラシア大陸東端部には世界的に見て最も大規模な海域の連鎖が設定できるとして、そのありようを概観した。そして、日本列島弧を取り巻く複数の海域もはるか有史以前から交流の場であり続けたことを指摘した。コンブの場合、産地はオホーツク海と日本海北部および太平洋三陸沿岸であり、その輸送経路は主に日本海・瀬戸内海であったが、さらにその他の海域を越境して「日本」以外の各地に伝播した訳である。

次に、従来の主たる比較文化史観・生態史観・唯物史観等とともに陸地中心の考え方であったとして、川勝平太の「文明の海洋史観」を検討した。川勝は海域概念を多島海という語で定義する。多島海には古来ネットワークの形成が見られるが、その観点は地球規模の視野で世界史を捉えることを要請する。この前提の上に、川勝はアジアの多島海の重要性を説き、近世初期にその舞台を共有した西欧と日本を比較し、その後における西欧の「世界システム」と日本の「鎖国体制」を経済的な類似の危機への類似の解決策であったとして、鎖国に積極的意義を見出す。

それに対して筆者は、鎖国時代にも強固な多島海ネットワークの一部が温存されていた例を交易の面から列挙し、特に薩摩から琉球経由で中国大陸に輸送されたコンブの重要

性を指摘した。

■第四章—越境するコンブ(1)～近世

この章では、最初に近世以前のコンブ流通における興味深い諸点に触れた後、近世のコンブ流通の実態について、その起点となる蝦夷地から終点へ辿る形で諸点を検証した。

まず、中世以降の蝦夷地は内国植民地であったと規定し、その侵略と開発の進展過程を「領域としての辺境」の北方への移動という観点から詳述した。コンブについても、辺境の北方への移動が採取場の拡大による対数的増産と種類増をもたらした訳である。その裏付けとして、Ⅱ章で設定した時代区分が辺境の移動と対応していることを実証的に述べた。

＜細布昆布時代＞には、和人の居住地は函館西方に限られ僅かにホソメコンブを採取していた。＜宇賀昆布時代＞には、それが函館東方に拡大しマコンブの採取も開始された。＜元揃昆布時代＞は噴火湾と日高地方の開発に始まり、元揃型マコンブとミツイシコンブの採取が開始された。さらに享保（1716～1736）から明和（1764～1772）にかけての時期は松前藩中興の時代で、蝦夷交易も全部請負制度となり商業資本の力が最も効果的に昆布業の開発に注がれたとされる。この時期の産地の拡大も著しく、日高・十勝・釧路方面、さらに厚岸方面にまで及んだ。＜長昆布時代＞はエトロフ航路の開拓に始まり、ナガコンブが1万トン台流通するようになった。ここで特に強調したのは、松前藩の蝦夷交易独占権の保有と近江商人を主体とする「場所請負制度」であり、その略奪的取引に対するアイヌの諸反乱である。

つぎに、江戸時代の商品経済の高度な発達

に言及して日本列島弧に張り巡らされた交通網を概観した上で、北前船による蝦夷地から西廻りでの大坂へのコンブの輸送について考察した。ここでは、北前船とは何を指すのかを定義づけ、それによる交易の特徴を挙げ、具体的な交易のありようを概観した。コンブ流通との関連において強調したのは以下の点である。北前船による交易の原則は「運賃積み」ではなく「買い積み」であり、地域ごとの価格差で利益を上げるという特徴がある。その商業形態は、情報伝達の未発達を前提にした、経済発展段階としては遅れた形態ではある。だが、その形態が北前船の各寄港地におけるコンブ消費の増加をもたらしたといえる。ゆえに主な消費地は日本海沿岸から瀬戸内の各地、そしてなканずく大坂となる。その影響で、II章で既述したコンブ食類型の地域的特質およびそれにまつわる各地の食文化が形成されていったのである。

そのつぎに、大坂から延長された“コンブロード”を眺めた。それは薩摩から琉球、さらには中国大陸にまで至る。近世の琉球王国は、清朝と「日本」の特に薩摩藩に対して二重朝貢貿易を行っていた。そのため「日本」にとっては、北方の例と同じく南西諸島もく領域としての辺境>であったといえよう。ここで特に指摘したのは、コンブの薩摩への流通に富山の売薬商が大きく関与していた点、中琉貿易におけるコンブの積荷に対する重量比は平均85%にも上り意義が大きかったという点、18世紀末に那覇にあった「昆布座」という薩摩藩の役所は対清貿易の中核であるのみでなく琉球支配の心臓部でもあったという点である。

最後に、薩摩藩の対琉球コンブ密貿易の背景を探るに当たって大石の説を検討した。その密貿易は、調所広郷が藩の高位にあった頃

と鳥羽伏見の戦い（1868年）の前後頃に増加し、1874（明治6）年に停止している。それらは藩財政立て直し時期と戦費調達の実必要性があった時期に一致する。大石は、それらの資金獲得のためにコンブ密貿易と黒砂糖増産が奨励されたのだと考え、特に鳥羽伏見の戦いで薩摩藩が使用した新式銃の購入にもその資金が充てられたとみる。それが事実だとすれば、日本の近代化の端緒となった明治維新において、その裏方としてコンブが重要な役割を果たしていたことになる。

■第V章—越境するコンブ(2)～近代

この章では、近代化過程期・第二次大戦期・戦後期の各時期におけるコンブ流通の変容を考察した。そして最後に内陸山間部へのコンブ行商の具体的事例を簡介した。

第一に近代化過程期では、コンブ交易は1859年の函館開港以降、函館～清朝という“公認”のルートが主体となり、1874（明治6）年に薩摩～琉球～清朝という“黙認”の密貿易と朝貢貿易によるルートは停止させられたことを述べた。その時点で琉球の外交権は完全に剥奪されたのである。また、アイヌを含めた北方少数民族を担い手とする「サンタン交易」もロシアとの関係から消滅したことに触れ、明治新政府という黎明期の近代国民国家の、明確な国境線の確定と無断越境の禁止、さらに自国内統制の強化という確固たる意志が感じられると述べた。南北のく領域としての辺境>の解体と当該地域居住民の国民化が急がれたのである。

ついで、国内のコンブ交易の主体であった北前船が19世紀末までに衰亡した過程を追った。原因の第一は、船舶の全般的な近代化にあって北前船が従来の日本型船に固執した点

である。これは技術上また経済上の困難からである。第二は、鉄道・電信という新しいメディアが普及した点である。鉄道に関しては、北陸地方の鉄道開通が地域の中心都市に消費地を形成したが、北前船のように少量の物資を数多くの寄港地で売買する商業形態にはそれが不利であったことを示した。また1891年の東北本線と青函連絡船の開通は北海道が東京経済圏に組み入れられたことを意味し、流通ルート自体が大きく変容したことを示した。電信に関しては、北前船のように価格差を利用して投機性を活かす遠隔地交易特有の商業形態は、情報伝達の敏速化によって利益が低下してしまうことを、事例を挙げて説明した。

第二に、第二次大戦期におけるコンブの戦争と食糧統制との関わりについて考察した。はじめに、明治以降の中国大陸へのコンブ輸出を概観した。幾度かの戦争による一時的な低迷はあったものの、それは概して順調な伸びを示した。特に1931年の満州事変直後と日中戦争で宣撫工作物資となった1940年頃に活況を呈した。

ついで、第二次大戦期の食糧統制開始から戦後の統制撤廃に至るまでの昆布業界の動向を考察した。昆布業界はすでに1940年に日本昆布配給組合（日昆配）を結成して一元的集荷配給機構を確立したが、1942年に農林省告示をもって「水産物配給統制規則」が発令され統制が本格化した。そして中央統制機関には日本海産物配給株式会社（日海配）が指定され、同年度産新コンブから統制による産地集荷・全国消費都道府県別割当・配給が実施された。ここで重要な点は、中央統制機関は葉売り用（家庭配給）割当基準を府県の人口割を主体として算出したことである。つまり消費量や利用種類などコンブ食類型の地域的特質がまったく無視されたのである。ここに

至って“コンブロード”は完全に破壊された。

第三に、戦後期のコンブのありようについて述べた。敗戦とともに昆布業界の混乱は頂点に達して統制機能は停止状態に陥り闇物資の公然たる横行も見られたが、徐々に流通機能が回復して1949年に他の水産物より1年も早く統制は解除された。その後かつての地域的特質が復活することになる。600年余の歴史をもつ特質は、100年余の近代にも揺るがず、短期間の破壊の後30年前後で復活したのである。

さらに、戦後“コンブロード”が海外にまで延長されたことに触れ、日本人の海外進出との関連を指摘した。西太平洋を南下してシンガポールに至る道と太平洋を横断してブラジルにまで至る道の二つが主要なものである。特に西太平洋の道は、ユーラシア大陸東端部の大規模な海域の連鎖と軌を一にする点で興味深い。

最後に、昆布の内陸山間部への輸送に関連して“イタダキ”に触れた。イタダキとは、頭上運搬を行う行商人であり、その特殊な形態は民俗学においても関心が払われている。ここでは北見俊夫の調査報告を参照して、徳島県の海村から遠く長野県にまで昆布を行商した一人のイタダキの個人生活史を紹介した。

■終章—結論

この章では、以上の記述を総括したほか今後の課題について述べた。

コンブを“メディア”として捉える、また“海域”を越境するという観点から流通を考察する、という序章で述べた本論文の二点の意義については上記各章で描いた通りである。

なお、近年におけるコンブの生産と流通の大きな変貌として、1969年の日中両国におけ

る促成栽培の開始による大增産、1972年の中国による日本向け輸出の開始、その後の日中コンブ貿易の逆転を補足した。そして、明治の富国強兵策の一環としてコンブの中国輸出が奨励されたとの羽原又吉の説に触れ、現代から見れば隔世の感があると述べた。

本論文の問題点としては、第一にフィールドワークを行っていないこと、第二に統計的手法を用いず定質的分析に終始したこと、第三に対中国輸出にのみ言及して中国内での輸送や利用には触れなかったこと、などの諸点がある。これらは今後の課題としたい。

最後に、筆者にとっての最大の関心は、近代の国民国家の成立によって“辺境”とされた地域における人・モノ・情報・貨幣の移ろいと交わりというテーマである。その観点から、近代とは、国民国家とは、そこでの“境界”の意味とは、等を問いたいと考えている。

参考文献

- 羽原又吉 1940 『日本昆布業資本主義史』有斐閣
- F・J・ターナー（著）松本政治 嶋忠正（訳）1973 『アメリカ史における辺境（フロンティア）』北星堂書店
- 大石圭一 1987 『昆布の道』第一書房
- 川勝平太 1997 『文明の海洋史観』中央公論社
- 北見俊夫 1989 「昆布の旅のダイナミズム」『日本海島文化の研究』法政大学出版会
- 浜下武志 2000 『沖縄入門—アジアをつなぐ海域構想—』筑摩書房
- Andre Gunder Frank and Barry K. Gills, eds. 1993 *The World System : Five Hundred Years or Five Thousand?* London, Routledge.